

家庭菜園の 病害虫

アマチュア
でもよく分かる
防除対策



第3回

キュウリ

前編：病害対策

大阪府立農林技術センター
草刈 眞一

みずみずしい緑の果色とさわやかな味が決め手のキュウリは、たくさんの品種分化があり、それだけに病気にに対する抵抗性も多種多様です。また、台木を用いて接ぎ木栽培を行うことなども考慮すると、栽培に対して的確な品種を選択することが何よりも大切です。的確な品種選びと病害防除、特に初期防除で病害虫の被害を最小限に抑えましょう。



栽培時期と病害対策

キュウリはウリ科の野菜で、春から秋にかけて栽培され、発生する病気も多いのですが、育苗期間を経過すると比較的栽培しやすい作物です。連作するとつる割病などの土壌病害が発生しますが、接ぎ木栽培で被害を回避することもできます。

キュウリには、果形や節成性（節ごとに着花結実する性質）など、たくさんの品種分化があり、また、病気に対する抵抗性も品種によって異なります。栽培時期や好みに合わせて品種を選ぶことが大切です。

育苗期～定植時までの対策

（露地栽培 4月～5月中旬）

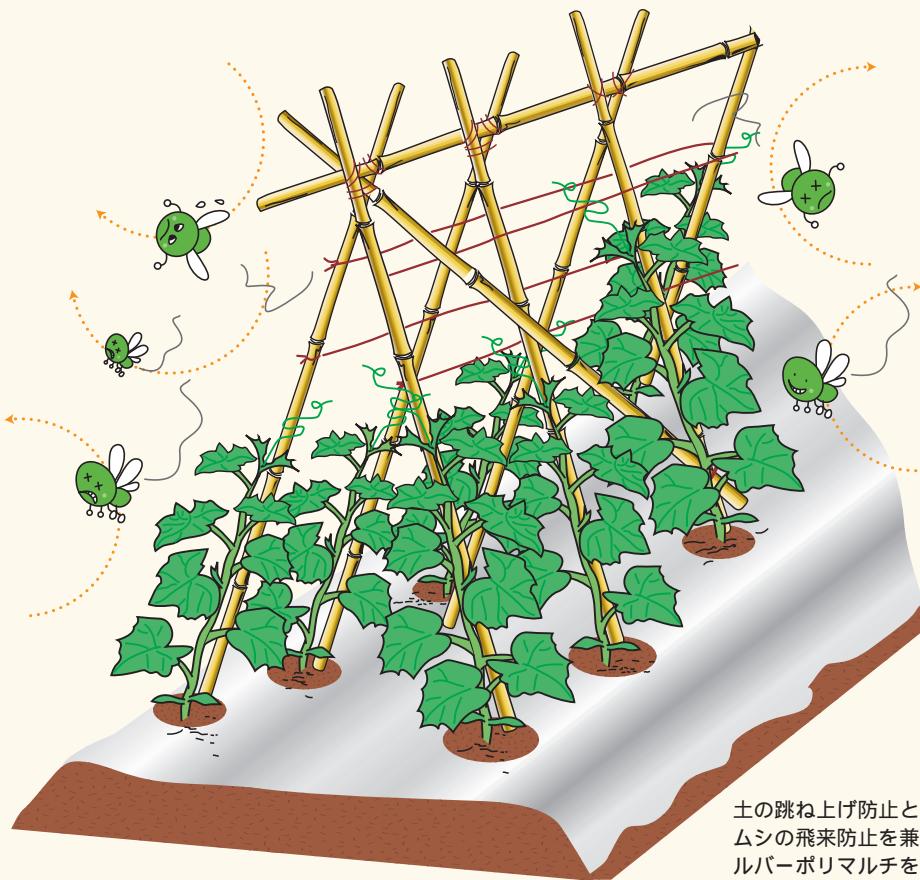
播種から子苗時期には苗立枯病^{なえたちかれ}が発生します。土壌中にはピシウム菌^{ピシウム菌}やリゾクトニア菌など、立枯病の原因

因となる病原菌が生存していますが、キュウリはこれらの菌に弱いので、しばしば立枯病が発生するのです。土はできるだけ新しいものを用いるようにし、排水に注意しましょう。畑の土を使う場合は、土を焼いて消毒するかバーミキュライトなどの資材を播種床に使い、発芽後、育苗用土を入れたポットに移植します。なお、水のやりすぎは立枯病の発生を助長するので注意が必要です。

生育期間中の対策

（露地栽培 5月中旬～6月中旬）

キュウリは生育が早く、この時期は草丈が伸びて旺盛な生育をする時期なので、支柱を立ててやります。降雨の多い時期に入り、雨滴で土が跳ね上げられることで斑点細菌病^{はんでんきん}などの病気の発生が見られることがあります。この時期は比較的病気の発



土の跳ね上げ防止とアブラムシの飛来防止を兼ねてシルバーポリマルチを張るのは、モザイク病防除に有効な方法である。

1-1 モザイク病



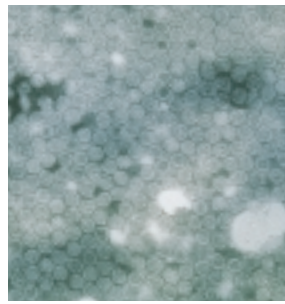
WMV（カボチャモザイクウイルス）による症状。激しいモザイク症状が見られる（中曽根 渡 原図）。

1-2 モザイク病



CMV（キュウリモザイクウイルス）に感染したキュウリの成熟葉の症状。

1-3 モザイク病



CMVウイルス。たくさんある円形の粒子がウイルス（中曽根 渡 原図）。

2 斑点細菌病



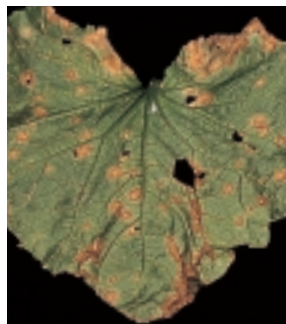
キュウリ斑点細菌病に感染した果実の症状。果実に褐色の病斑ができ、周辺部は水浸状となり病斑から粘質状の菌泥を生じる（元・大阪農技センター 田中 寛 原図）。

3 うどんこ病



比較的初期の病斑状態。白色円形の病斑が多数できる。発生が進むと、葉全面が白色粉状の病斑で覆われる。

4 炭そ病



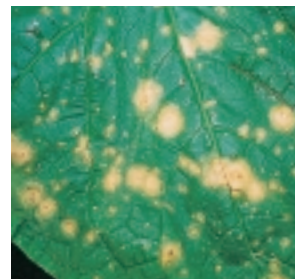
褐色円形の病斑が多数生じ、時間が経過すると病斑に穴があく。

5 ペト病



角形で、やや黄色くなった病斑を生じるのが特徴。

6 褐斑病



淡褐色円形の病斑を生じる。4の炭そ病と類似するが、やや病斑の色が薄い。また、病変の中心部に目（小点）があるのが特徴。

7-1 灰色かび病



果実に発生した灰色かび病。果実が腐敗して灰色のかびに覆われる（元・大阪農技センター 田中 寛 原図）。

7-2 灰色かび病



葉に発生した灰色かび病の病斑。水浸状の病変部が生じ、表面にかびを生じる。

8 菌核病



病変部に白色菌糸が蔓延し、ところどころにネズミの糞様の菌核ができる。

9 苗立枯病



子葉を展開した苗が次々と腰折れ状態となって枯死する。発芽前に発病すると、地中で種子が腐敗して発芽しない。

10 疫病



茎の地際部分があめ色に変色し、やや細くなる。地上部は、日中しおれるようになり、やがて株が枯死する（元・大阪農技センター 田中 寛 原図）。

11-1 つる割病



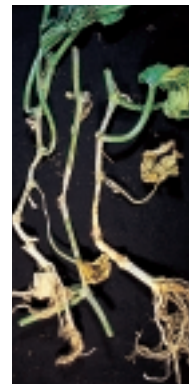
根から病原菌が感染し、発生すると、地上部が萎ちょう、枯死する。

11-2 つる割病



地際部を切断すると、維管束が淡褐色になっている。

11-3 つる割病



キュウリのつるが裂け、サーモンピンク色の胞子を生じる。写真のようにつるが細くなり、裂け目を生じ、株が枯れ上がっていく。

キュウリの病害虫の発生時期と特徴

病害虫名	発生時期・被害箇所												防除対策	
	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	薬剤による防除	その他の防除対策など
	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下		
モザイク病 (CMV, WMV) (写真①参照)													害虫対策編(次回)を参照	<ul style="list-style-type: none"> 育苗期間中、寒冷紗をかけてアブラムシの飛来を防止することもできる 定植する時にシルバーポリマルチをするとアブラムシの飛来を軽減できる モザイク症状や葉に奇形の見られる株は早めに除去する
斑点細菌病 (写真②参照)													<ul style="list-style-type: none"> カスミンボルドー オキシボルドウ 	<ul style="list-style-type: none"> マルチ栽培にすると被害が軽減できる 例年発生の多い圃場では、早めに薬剤を散布して発生を防ぐ
うどんこ病 (写真③参照)													<ul style="list-style-type: none"> トリフミン水和剤 ベルクート水和剤 カリグリーン 	<ul style="list-style-type: none"> 病原菌の胞子は風などによって運ばれ伝染するため、近くにウリ類のうどんこ病が発生していると注意が必要 発病初期に薬剤を散布して防除する
炭そ病 (写真④参照)													<ul style="list-style-type: none"> オーソサイド水和剤80 	<ul style="list-style-type: none"> 淡褐色円形病斑が見られたら、早めに薬剤を散布して防除する
べと病 (写真⑤参照)													<ul style="list-style-type: none"> オキシボルドウ オーソサイド水和剤80(リドミルMZやサンドファンMで高い防除効果が得られる 農薬専門店、農協で入手できる) 	<ul style="list-style-type: none"> 5月下旬ごろから注意して観察し、葉に角形の黄緑色の病斑ができれば薬剤防除する 毎年発病するようであれば、発病時期に薬剤を予防散布する
褐斑病 (写真⑥参照)													<ul style="list-style-type: none"> 灰色かび病の薬剤で同時に防除が可能 	<ul style="list-style-type: none"> 炭そ病とよく似た病斑ができるが、中心部に目のある病斑が特徴 早めに薬剤散布する
灰色かび病 (写真⑦参照)													<ul style="list-style-type: none"> トップジンM水和剤 ベンレート水和剤 	<ul style="list-style-type: none"> ハウスでは換気により湿度を低くし、また、冬季は加温すると被害が減る
菌核病 (写真⑧参照)													<ul style="list-style-type: none"> トップジンM水和剤 ベンレート水和剤 	<ul style="list-style-type: none"> 発病株を放置しない(病患部にできた菌核が感染源となる)ことが大切 被害の出る圃場では早めに薬剤散布する
苗立枯病 (写真⑨参照)													<ul style="list-style-type: none"> オーソサイド水和剤80 プレビクールN液剤 	<ul style="list-style-type: none"> 播種床や育苗用土には新しい土を用いる
疫病 (写真⑩参照)													<ul style="list-style-type: none"> プレビクールN液剤 	<ul style="list-style-type: none"> 5月中旬ごろからキュウリが萎ちようして枯死するようであれば、注意が必要 早めに薬剤を株元へ灌注処理する(ジョウロで薬液を株元へかける)
つる割病 (写真⑪参照)													<ul style="list-style-type: none"> 土壌消毒には、ダゾメット微粒剤を土壌に混和してビニール被覆する 2回程度ガス抜きしてから作物を移植する 	<ul style="list-style-type: none"> 連作すると多発するため、毎年発生するようであれば、栽培を避けるか土壌消毒が必要 カボチャを台木にした接ぎ木栽培にすると被害を回避できる